

## 徒然草の魅力 吉田兼好

インターネットで徒然草と入力して検索しても、どういうわけか古典の徒然草は殆どでてきません。徒然草を利用した？日記が大部を占めています。それはなぜか。おそらく余りに有名な序文からきているのだろうと思います。

つれづれなるままに日暮らし硯にむかひて心にうつりゆくよしなしことをそこはかとなく書きつづればあやしうこそものくるほしけれ。

現代語に訳すとだいたいこんな意味になります。

一日中、ひまでひまで手持ち無沙汰に任せて一日中、硯に向かつて心の中に浮かんで消えていくようなどうでもいいことをあれやこれやと書きつづっていくと不思議なほどにいろいろな思いがわいてきてただごとではないような気がして

くる。

閑ひまに任せてなどと言ってますが、そこに書き記された内容は、仏教的なものに始まり、芸道に関するもの、美的情趣に関するもの、男性論、女性論、飲酒論、生活論、説話的なもの、有職故実等、幅広く、人間・社会に対する深い洞察と鋭い観察眼をもつて描かれています。

「猫またというものがいて人を喰うぞ」等という噂を聞いていたところ、夜半連歌の会の帰り道に何かに飛びつかれ、「猫まただ」といつて這々（ほうほう）の体（てい）で逃げ出せば、それは飼犬が主に飛びついたただけだったという笑ってしまふような話（第八九段）。高いところでは注意せず低いところで「心して降りよ」と注意した高名の木登り等、おかしかったり、はつとしたり、うなずいたりという話が満載まんざんされています。

そうそう、諸矢もろやたばさみでのお話もいいですね。次があると思うと油断しがちです。

吉田兼好。京都の吉田神社の神官の家で生まれ卜部兼好とも兼好法師とも言われています。彼が生きた時代は、平安末期から鎌倉末期。政治経済の混乱と末法思想（この世の終わり）が流行はやりった時代です。徒然草には仏教的無常観（この世のものは常ならず）や尚古思想（昔を尊ぶ）が流れています。

徒然草を書いたのは兼好が四七歳の時、一三三一年だったであろうと言われています。平家

が滅び、鎌倉幕府が開かれ、その源氏も三代で潰えという時代です。

京都洛西・嵯峨野を一望出来る丘きゅうりょう、陵らうが、古都の西方にありますけれど、これを双ヶ丘と呼んでいます。この双ヶ岡の麓に法金剛院（長泉寺）がありますが、兼好は、ここに無常所を設け思索をしたのでした。政治の舞台は鎌倉に移っています。きらびやかな都の世界は終わっています。そこで、兼好は、双ヶ丘の粹いきほ法師といわれると共に、こよなく桜の花を愛したようなのです。（今も、法金剛院（長泉寺）の周辺は桜で有名です。）

ところで、徒然草は随筆です。日本三大随筆と呼ばれるものに「枕草子」（清少納言）、「方丈記」（鴨長明）そしてこの徒然草があります。

方丈記もまた徒然草より時代を少し前にした平安末期、源平の争乱の時代に成立していることを思うと、「ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。」（方丈記）という思いは徒然草にも流れていると感ずるのです。しかも、三代随筆の二つが同じ時代に書かれていることに私は大変興味を覚えるのです。

ただ過ぎて行くもの

帆かけたる舟と 春夏秋冬